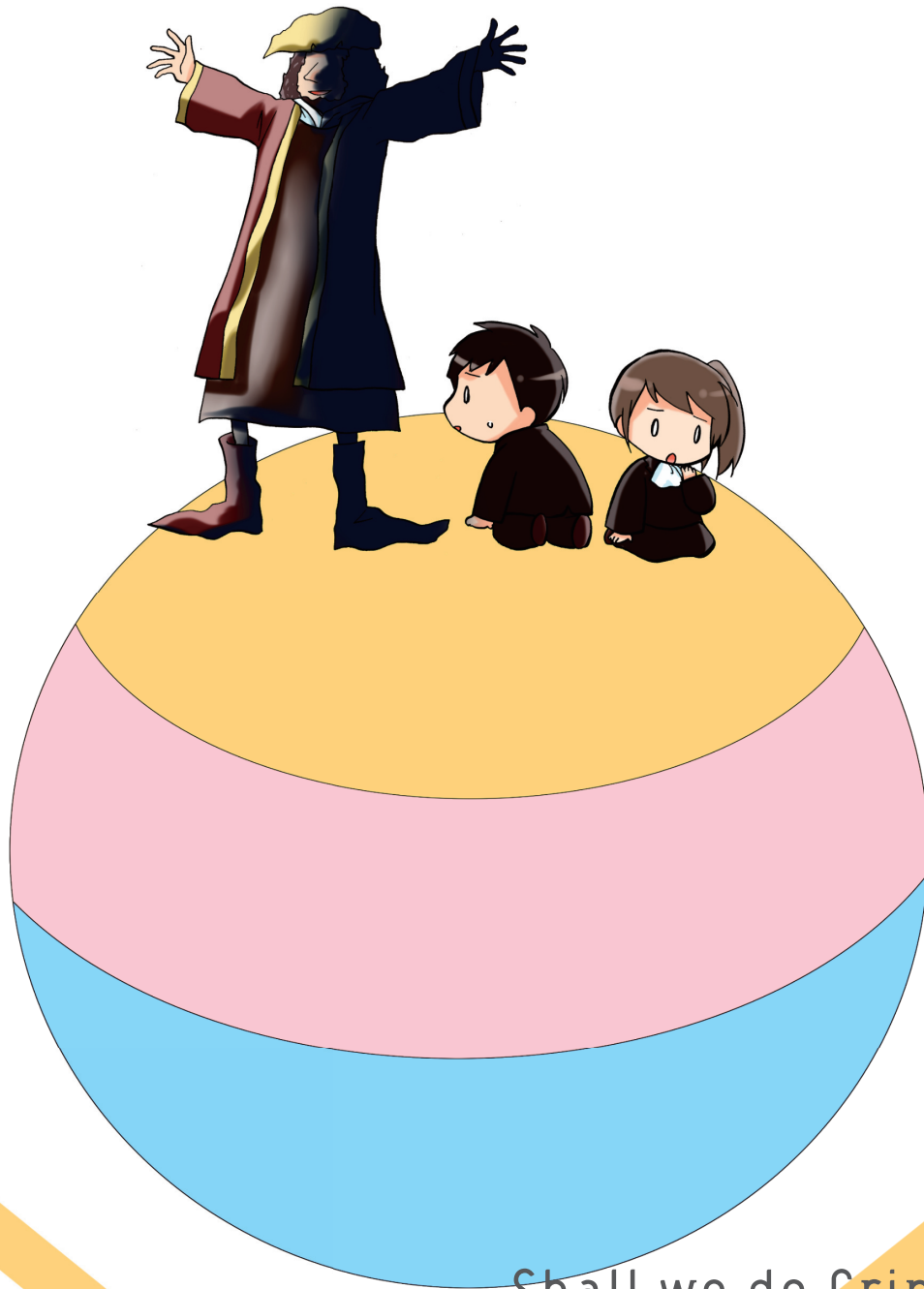


犯罪学っておもしろい？



Shall we do Criminology?

龍谷大学
犯罪学研究センター

Criminology Research Center
Ryukoku University

You,
Unlimited



龍谷大学が目指すやさしい犯罪学

さまざまな「知」を融合し、 「龍谷・犯罪学」を構築します

本学は40年以上の間、建学の精神を具現化するため、犯罪や非行をおこなった人たちの社会復帰を支援する矯正・保護の活動を展開してきました。2010年には研究、教育、社会貢献を三本の柱として、刑事政策に特化した日本で唯一の私立大学の研究機関として矯正・保護総合センターを開設しました。

この伝統と実績を踏まえ、2017年に犯罪学研究センターを開設。犯罪予防と対人支援を基軸とする龍谷・犯罪学を構築し、龍谷ブランドとして国内だけでなく、海外にもアピールしていきます。当センターの特色は、犯罪予防と対人支援を目標に、犯罪をめぐる多様な「知」を融合し、新たな犯罪学を体系化しようとする点にあります。

ありのままの姿をありのままに見る

開学380年を迎えようとしている龍谷大学の建学の精神は、「浄土真宗の精神」、すなわち生きとし生けるものすべてを、迷いから悟りへ転換させたいという阿弥陀仏の誓願です。自己中心に陥って真実に背を向けることなく、ありのままの姿をありのままに見ることを大切にします。

龍谷・犯罪学は、ともすれば、上からの目線で犯罪者や非行少年に教化改善を押しつけがちな犯罪対策の思い上がりを省みて、すべての人の主体性を尊重し、その人らしい生き方を阻んで



いしづか しんいち
石塚 伸一

センター長 龍谷大学法学部教授

いるさまざまな障碍を科学的に究明し、みなが共に平和な環境下で回復していくことをめざします。

犯罪を見るということは、その原因である家族、地域社会、全体社会、国家、世界、そして生きた人間を知ることです。統計的に見ると日本の犯罪発生率や刑務所収容率は低いですが、その原因はいまも十分に解明されていません。龍谷・犯罪学は、日本の文化や歴史、社会や世界を科学的に認識することによって、真実をみつめる心と技を身につけることを究極の目的にしています。

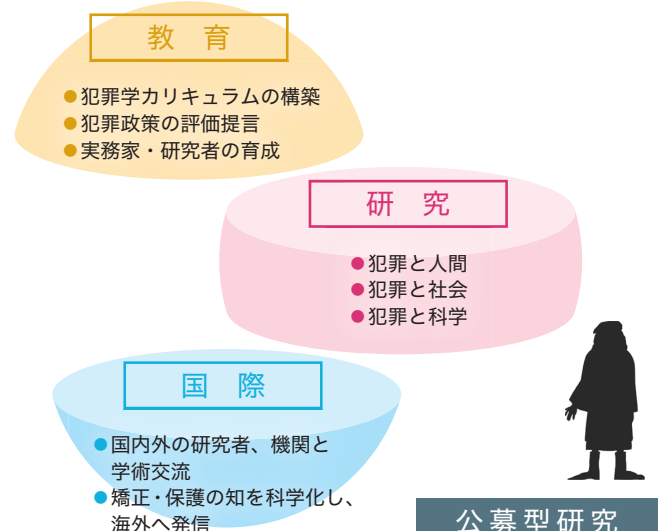
犯罪学っておもしろそう——。そう思ったら、“Shall we do Criminology?” 私たちと一緒に犯罪学を学びましょう。そして、その答えを探してみましょう！

犯罪学創生プロジェクトを構成する3つの部門

犯罪予防と対人支援の龍谷・犯罪学は、犯罪学・刑事政策の将来の構想を展望するため、3つの部門にさまざまなプロジェクトを配置しています。

- ◎研究部門 「犯罪と人間」「犯罪と社会」「犯罪と科学」の3つのフィールドで、それぞれのユニットが独自のパースペクティブ(接近方法)から犯罪現象を調査研究します。
- ◎教育部門 調査研究の成果を踏まえて、現実の犯罪対策や刑事政策の評価、新たな提言を行うとともに、犯罪学の将来を担う多様な人材を育成します。
- ◎国際部門 犯罪学に精通した諸外国の研究者や研究機関と交流を図りながら、日本の犯罪学の水準を高め、研究の成果を広く海外に発信します。

2020年に京都で開催される第14回国際連合犯罪防止刑事司法会議(コンGRESS)に併せ、私たちの犯罪学・刑事政策構想をまとめ、これを「龍谷会議2020」として発表します。



公募型研究

研究部門

犯罪予防と対人支援を基軸として、犯罪現象にさまざまな角度から光をあてることで、その実像に迫ります。各専門分野のエキスパートと共にご紹介しましょう。



つしま まさひろ
津島 昌弘

研究部門長 龍谷大学社会学部教授

■罪を憎んで人を憎まず!? —犯罪と人間—

刑事施設にはADHD(注意欠如多動性障害)に悩む人たちがいます。精神科医の武田俊信さんは、司法心理の専門的知見に基づき、実態を調査し、当事者をサポートします。

また、現代社会にはさまざまなアディクション(嗜癖・嗜虐)に悩むアディクト(依存者)がいます。治療法学の石塚伸一さんが、薬物依存者の回復のため、当事者の主体性を尊

重した“えんたく”(サークル)を構築して支援します。

刑事施設では、宗教によって心の回復を支援する教誨師が活躍しています。井上善幸さんは、本学の歴史と伝統を踏まえ、親鸞聖人の教えに基づく矯正宗教学を模索しています。

このフィールドでは、心理学、法学、宗教学の視点から受刑者や非行少年の回復支援に取り組みます。

■犯罪は社会を映す鏡? —犯罪と社会—

親不在でこどもだけで食事をする「孤食」の社会問題化、「親はいるが心理的には不在」な状況がこどもの健全な成長にどのように影響するのか、社会福祉学の立場から黒川雅代子さんは研究します。

犯罪は「個人がおかすもの」ですが、「社会によって作り出される」という側面があります。社会学者の津島昌弘さんを代表とする研究グループは、少年非行に関する国際比較調査ISRD(International Self-Report Delinquency

Study)を通じて、日本特有の少年非行の傾向や原因を解き明かします。

犯罪現象に対するアプローチは多様で、それぞれの社会や国の文化に規定されます。個人主義の国フランスの犯罪学の研究者である赤池一将さんは、集団主義に支配される日本の刑事政策を批判的に分析・検討し、民間サイドから「対案」を策定することを目指しています。

■犯罪を科学する? —犯罪と科学—

日本の犯罪学をエビデンス・ベースト(科学的証拠に基づく)することを提唱する浜井浩一さんは、国際的政策評価プロジェクトである「キャンベル共同計画」や欧州スタンダードの被害者調査などの実践を踏まえて、内外の政策決定者に科学的情報を提供しようと努めています。

また、世界水準の犯罪学教育カリキュラムの構築とその実践により、日本の犯罪学教育の基本的枠組みを確立する

ことも私たちの課題です。

日本の刑事司法における科学鑑定のありかたに疑問をもつ古川原明子さんは、画像解析・映像解析やDNA鑑定などの科学鑑定の信頼性・信用性の基準や指針を見直そうとしています。近年注目されている「揺さぶられっ子症候群(SBS)」における鑑定の危うさは、私たちが科学を利用する基本姿勢を問うています。

多角的に犯罪学をみる公募型プロジェクト

龍谷大学の多様な研究の蓄積と多彩な人的資源を開拓するため、全学に協力を呼びかけました。2017年度には「ヘイト・クライム」「性犯罪」「保育と非行予防」の3つの「公募型プロジェクト」が採択されました。

金尚均さんは日本社会の根幹にある差別と犯罪の関

係について、斎藤司さんは性刑法の改正や最高裁の判例変更などで激しく動いている性犯罪について、中根真さんは保育の段階からはじまる非行問題について、それぞれ調査研究を進めています。

教育部門

研究部門が行なった調査研究の成果から日本語版・英語版のカリキュラムを構築し、国内外に発信します。また研究結果は研究会や勉強会などを通じて公開する予定です。2016年、2017年に開催した「法教育フェスティバル」をはじめ、小中学生から高校生、大学生、一般市民への「わかりやすい授業」で「知」の共有を図っていきます。

犯罪学カリキュラムについては、インターネット等で公開し、専門家等から多様な意見を聴取した上で、学修教材の作成、学修システムの検討を行います。このように調査研究の成果を踏まえて政策提言や教育活動を実践することによって、実務者や研究者を育成し、研究の成果をさまざまな形で社会へ実装することを目指しています。



あかいけ かずまさ
赤池 一将

教育部門長 龍谷大学法学部教授

国際部門

日本の犯罪学を国際水準に引き上げるため、研究者を大学や研究機関に派遣して、学術交流を図ります。海外や国際学会では、積極的に研究成果を発表していきます。また、国際水準の研究者を招聘して、国内でシンポジウムやセミナーを開催します。国際的には、日本は「犯罪の少ない国、安全な国」と評価されています。その原因を究明して理論化します。

本学が40年余にわたって蓄積してきた矯正や更生保護に関する「知」を集約・科学化し、犯罪予防と対人支援の龍谷・犯罪学ブランドを確立します。



はまい こういち
浜井 浩一

国際部門長 龍谷大学法学部教授



龍谷大学 犯罪学研究センター
RYUKOKU UNIVERSITY

〒612-8577 京都市伏見区深草塚本町67
Tel 075-645-2154 Fax 075-645-2240

<http://crimrc.ryukoku.ac.jp/>



ドクター・クライム
わたくし、Dr. Crimeが、
これから「龍谷・犯罪学
(Criminology)」について
紹介していきます